

書評 英字新聞ジャパントイムズ 2011年11月6日(日曜日)

『対訳付き 終わらない一日 ～ ハンス・ブリンクマン詩集(溝口広美訳)』

(トラフォード出版、2011年) 価格 1,200円(ペーパーバック) 2,400円(ハードカバー)

## 四季折々にふさわしい言葉 評者: スティーブン・マンズフィールド

実際にハンス・ブリンクマンに会ってみると、もてなしの達人あるいは習熟したセレモニー進行役のような、気品あふれる小粋なヨーロッパ紳士であることがわかる。ところが、長い年月を重ねて編み出されたこの詩集を読んでも、もしかしたら、ブリンクマンは、中国の清朝でもっとも高名な学者といわれる陳扶搖のように、ゆったりとした長衣を着こなすこともできるのではないかと思ってしまう。

世界中の大都市で暮らしたブリンクマンの詩は、詩における二大テーマともいえる「時間の流れ」と「物質的現実性」に焦点をあてる。文学の豊かさは、長寿と関係することもある。現在80代の、カリブ海セントルシア島生まれの詩人デレック・ウォルコット(1992年ノーベル文学賞受賞)のように、齢を重ねるにつれ、ますます磨きがかかる詩人もいる。ブリンクマンもまた、詩人であり続け、現在も文筆活動を進行中である。1950年に初めて東京にやって来て、その後日本を離れたものの、数年前に再び東京暮らしを始めた。

文学ジャンルのなかで最も難しいのが詩であることは周知のとおりだ。言葉との苦しい格闘をするものの、真の作品が出来る確率は低い。一方詩の鑑賞はごく自然にできる。おそらく詩とは、本来備わっているもの、祖先の音楽のようなもの、帰るのではなく戻るべき流れのようなものなのだ。

ブリンクマンの作品は必ずしも自然をテーマとしているわけではない(ただし人間性は含まれている)。それぞれの詩の最後に、創作した年と場所の名前が記されている。国際銀行のキャリアに加え、知的好奇心あふれる旅行家ゆえ、創作した場所もヴェニス、シドニー、京都、ビバリーヒルズ、さらにはパリのシェルシュ・ミディ通りにあるビストロ“ジョセフィーヌ”といういろいろだ。

詩とは人生の意味を明らかにするのではなく、生きていることを表現することであると、どこかでブリンクマンは書いている。たしかに、彼の詩は読み手に答えを与えようとはせず、むしろ、強烈なイメージリーによって問いかけ、認識させる。

「風にまかせて飛ぶことができ／不義を犯した友を許すことができ」と始まる詩や、「未亡人たちがどっしりと降りてくる／まるで塗りたくられた鉛製のバルーンのように」と始まる詩など。

『聖なるグリーン』は、いささか大げさに利用されている緑色(グリーン)に対する、物静かな抵抗の詩だ。

「ゴルゴダの丘の使徒たちのように／急増する聖職者たち」

喪失と慕情を詠む詩もある。痛みを取り除くことはできないが、あいたままの傷口をふさぎ傷跡を我慢することはできる。愛する人が永眠することにとまどう気持ちは、哀惜というより喪失に近い。

「あなたの墓は石の家すぎない

じっと見つめる - でも、そこにあなたははいない」

優れた観察眼と共時性という、詩人が駆使できる様式を体現した詩もある。例えば、著名なオランダの女流作家と交わしたキノコについての会話が、白い両手を開いた少女のいる大阪のパーに変わる。

「少女があばいた秘密。それは

広島のコノコ雲で黒焦げにされた左右の手のひら」

神話の書き換えを試みる詩もある。母の原型=イブは追放された罪人ではなく、生の謳歌とセクシュアリティの再現を約束するものであり、宿命のリングは、アダムに差し出されたのではない。

「通りすがりの馬上の男に差し出した

男の飢えと馬に乗りたいたいというイブの渴望が一致した」

本書の巻末を飾るのは『希望の丘のパラード』だ。詩集のなかでも長いこの作品は、ヴィクトリア朝詩人マシュー・アーノルドやアーサー・ヒュー・クラフをどことなく彷彿とさせるところがあるが、作品にあふれる楽観は時間を超越し、潮流をなし、環状を描く。吟遊詩人オルフェウスのように、隠された人間の本質と歴史のかたちを、あからさまにしてゆく。

ブリンクマンは、一貫して、ミディエーターとして自らを位置づける。あたかも時の流れに助けられながらエネルギーを再補給し、そのエネルギーを送り出す。偉大な詩人も含め人間存在のむなしさのみを謳う詩人がいるが、ブリンクマンは、人生のみなざる活気を讃える。たとえ、年とともに、その活気が穏やかな流れのなかに飲み込まれていこうとも。

冬を、静かな喜びと瞑想と学問の季節と信じていた中国の文人たちのように、詩人の成熟期とは、もっとも内省的な季節といえよう。

(訳者 溝口広美)